



越中万葉かるたから

教頭 神田 敏宏

立山にふり置ける雪を常夏に 見れども飽かず神からならし（大伴家持）

札を読み上げる先生の声が響いています。

今年も4年生から6年生が参加して、「越中万葉かるた」の練習が始まりました。子供たちは、朝活動の時間に4階和室に集合し、落ち着いた中にも緊張した時間を過ごしています。廊下には、ブックが整然と並んでいます。本校では、古里の文化に触れるとともに、集中力や礼儀作法を身に付けるためにこの「越中万葉かるた」に取り組んでいます。毎年行われる「越中万葉かるた大会」では、団体戦や個人戦でよい成績を残しています。

子供たちが頑張っているこの「越中万葉かるた」について少し調べてみました。

奈良時代最大の歌人でもあり、「万葉集」の編纂者でもあった大伴家持が、29歳の時に越中守（えっちゅうのかみ）に任命されました。家持は政務のかたわら、二上山・かたかごの花・ほととぎす等越中の自然に触れて感動し、歌心を育み、想像力を駆使して歌作りの腕を磨き、5年間に223首を詠んだそうです。いかに大伴家持が越中を愛していたかが分かる気がします。一緒に歌った部下たちの歌等を含めて「越中万葉」は、337首になりました。

万葉ゆかりの地において、子供たちが遊びを通して郷土の歴史や風物に親しみ、誇りと愛着心をもつことを願い、多くの歌の中から、越中の風土に富み、子供にも大人にも愛誦されるであろう百首を選んで作られたのが「越中万葉かるた」です。昭和55年2月に完成し、同年3月には、「第1回越中万葉かるた大会」が開催され、多くの小中学生が参加したそうです。

高岡市の伝統ある「越中万葉かるた大会」が1月17日に行われます。大会に向けて、子供たちの練習は冬休みも続きます。東五位っ子の健闘を祈ります。

最近万葉かるたをやっています。

家で上の句だけで取る練習をしてきました。次の日には、たくさんとることができました。練習してよかったなあと思います。これからはがんばりたいと思います。 6年

デジタル化が奪った「合間」

情報主任 中井 兵馬

先日、書店で一冊の本と出会いました。タイトルは、『新しい道徳』（2015、幻冬舎）。著者は、かの有名な映画監督・北野武氏です。興味本位で手にしてみると、教師として、そして一人の大人として勉強になることがたくさんありました。今回は、情報に関する思慮深い一説があったので、紹介させていただきます。

「デジタルには合間も隙間も余白もグレイゾーンもない。だから、その隙間を乗り越えるための苦悩を知らない。」

デジタルとは、0と1、白と黒の世界。0から1にいくまでに、本当は様々な葛藤や努力があるはずなのに、いきなり1にポンと飛ぶ。クリック一つの容易さから、白からグレー、グレーから黒という過程があることを、いつの間にか忘れさせてしまう。本当は、0から1の隙間を乗り越えるために、考えたり悩んだり努力したりすることこそに価値があります。それにも拘らず、悩むだけ無駄だから、とりあえず Google で検索して Wikipedia で調べよう、なんて言っている人がいます。誰かが山頂で撮った写真を見て、自分も登頂した気になっている人がいます。登山は自分の足で山頂に立たなければ意味がないのに。北野氏はこのように述べ、ネット上の誹謗中傷等を例に挙げ、世の中が以前より不寛容になった気がするかと嘆いておられました。なるほどと思えた考えでした。

デジタル化は、私たちの生活の「合間」を省略します。デジタル全盛期を生きる私たちは、そのおかげで、仕事や作業の効率化を図ることもできる一方、そのために、価値あるものをも奪ってしまうことがあるということを、肝に銘じなくてはならないと感じています。

